



発行所
 社団法人 国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都渋谷区東1-13-1-402
 振替 00170-1-60507
 電話 03-5468-6230
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部
 毎月一回10日発行
 購読料 年間2000円

半世紀を積み重ねて伊勢へ
 生きた言葉に心を寄せた三泊四日
 第五十回全国学生青年合宿教室

合宿運営委員長 山口秀範

「日本人の心のふるさと伊勢神宮で学ぼう」との呼びかけに応じて全国から参集した二百二十名は、第五十回の記念すべき「合宿教室」でそれぞれ精いっぱい心身を働かせつつ三泊四日間をすごした。

開会式後のオリエンテーションで私は「合宿生活を通じて目に見えないものの存在に気付き、それをそのま



ま信じる力を養って欲しい」と参加者に申しあげたが、毎朝五時半に起床して「内宮」早期参拝

や「外宮」での御神楽奉納(第二日目午後)など、日常では得難い数々の体験を共有できたことはこの合宿の大きな特徴であった。各講師の熱のこもった講義はどれも高度な内容であったが、この伊勢の地が持つ独特の気といったものに包まれて、自づと聴く姿勢が整へられたやうだ。

そして時空を越えた古への御代(神々の世界)へと皆が極く自然に導かれ、遠い祖先たちの心情や願ひを憶念し合ふ場が現出した。

本「合宿教室」の第一回は、昭和三十一年夏に九州霧島で九十二名参加のもとに開催された。今は亡き小田村寅一郎・川井修治・瀬上安正各先生を初め合宿運営に当たった方々の多くは、先の大戦で敬慕する先輩・心知る友人を失ってをられ、その遺志を受け継ぐ思ひが、次代を担ふ学生青年の

育成」を目指す「合宿教室」事業へと結実したのであった。

その精神は五十回目へとつながり、今夏の合宿でも参加者一人ひとりが数多くの生きた言葉に触れた。それは、靖国の英霊たちの死を厳肅に受け止めた日系ブラジル人少女の「あなたの生命をもらって今生きているよ。本当にありがとうございました」といふ感謝の呼びかけ(導入講義で紹介)であり、ご遷宮に奉仕した宮大工の棟梁の「誰が褒めてくれなくても、神さんが喜んでくださりや本望」といふ談話(松浦光修先生のご講義で紹介)であり、また美しい響きを持った書物「詞の玉の緒」の序に本居宣長が記した「言の葉の玉のよそひ(は)ぬきつらぬる」とに在るは」といふ日本語の本質に迫る洞察の文章(長谷川三千子先生のご講義レジュメから)でもあったらう。

各講義の後には、寝食を共にする班友との研修が設けられたが、そこでは各人が想像力を駆使して、初めて出会った言葉を自分のものにする努力が、互ひの切磋琢磨により継続されたのである。

短歌創作と引続いての相互批評は初参加者にとって未知の経験であったが、自分の気持ちを表はす的確な言葉を探し、同時に他者の歌をわがこととして

味はひ、より良い表現に改めるといふ心血を傾けた時間の後では、言葉とそれを発した人の心への洞察は一層深まっていった。そして、聖徳太子のお言葉「国家の事業を煩となす。但大悲息むことなく、志、益物を存す」や、終戦の詔書「昭和天皇が深く国民を信頼しつつ吐露された、茲二国体ヲ護持シ得テ」など我が国を貫く、国柄に關する重大なご表現にも心を寄せる作業が最終日まで展開されたのである。

『混沌の時代に指標を求めて』(第一回合宿教室のレポート冊子名) 船出してから半世紀、我が国の思想・言論界は益々混沌を深め、国家の溶解さへ危惧される昨今である。「日暮れて道遠し」の感も否めないが、一方毎年の「合宿教室」から「真正なる日本人」といふ自覚を持った学生青年が確実に輩出されてあることも疑ひない事実である。次の五十年、「国文研合宿教室」が祖国再興の一翼を担ひ続け、今回参加した学生諸君が「第百回記念合宿」の講師や助言者として登場する姿を想像することは大変心楽しい。

台風襲来と共に季節は移りつつある。今秋の各地の勉強会では、三泊四日で積み残した各人の課題に力を協せつつ取り組んでいきたい。

(株)寺子屋モデル社長